

# 空襲・戦災・戦争遺跡を考える 九州・山口地区交流会報告集

と き：2014 年 11 月 29 日(土) 13:30-18:00

ところ：柳川総合保健福祉センター「水の郷」

## 目 次

|                                |       |    |
|--------------------------------|-------|----|
| 呼びかけ人あいさつ                      | 鈴木 裕和 | 1  |
| 交流会概要                          |       | 2  |
| 『郷土誌史』に見る鹿児島県南薩地区の空襲           | 國崎 潤  | 3  |
| 沖縄の極東航空軍による九州に対する空襲            | 工藤 洋三 | 18 |
| 戦災を生き抜いた建造物の保存活用～昭和 100 年に向けて～ | 藤木 雄二 | 28 |
| 原爆被害に対する国の対応の現状と問題点            | 山田 拓民 | 35 |
| 高瀬川鉄道橋梁の防空と墜落米軍機               | 高谷 和生 | 37 |
| 有明海に墜落した B-29 と漂着した搭乗員         | 鈴木 裕和 | 48 |
| 西部軍管区に墜落した連合軍機と捕虜飛行士           | 福林 徹  | 54 |
| 閉会のあいさつ                        | 工藤 洋三 | 61 |
| 交流会資料                          |       | 62 |

## 高瀬川鉄道橋梁の防空と墜落米軍機

高谷 和生\*

### 1. はじめに

太平洋戦争終盤 1944 年 6 月の北九州八幡製鉄所への B29 による爆撃をかわきりに、日本本土では昼間、高々度からの鉄道、軍需工場等へ空襲が激化し、大本営では来るべき本土決戦に向けて本土に駐留する高射砲集団・師団の組織替えが行われ西部高射砲集団が編成（註 1）された。

特に九州では、1945 年 4 月沖縄戦開始頃から八幡製鉄所を中心に北九州地区を守っていた本集団を母体として、通常の防空だけでなく、連合国軍の上陸が予想される南九州の野戦防空という新たな任務に向けて、1945 年 4 月 28 日高射第四師団が編成（註 2）され、多くの部隊が中・南九州地区に、当地では高瀬川鉄道橋梁防空に分散配置された。なお、本師団の兵団文字は「彗」である。

本稿では熊本県内各地の日本側防空状況を俯瞰し、当地玉名・高瀬川鉄道橋梁での防空体制を残された戦争遺構や遺物、証言等から論考する。また、8 月 10 日当地への空襲時に撃墜された米軍機について新出資料の連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）法務局調査課報告書第 2369 号を基に概要報告する。

### 2. 熊本県内の防空概要

#### (1) 熊本師管区高射砲隊

沖縄作戦の進展に伴い、特に南九州の戦備を速急強化するために、1945 年 5 月 8 日熊本師管区高射砲隊に高射第四師団から部隊が抽出された。その概要は高射砲第百三十二連隊第二大隊（特七高二中隊・八高五中隊の計 36 門）と機関砲第二十一大隊の一小隊である。その配備地と被掩護物件は次の五箇所で「熊本：飛行場、三菱飛行機工場、機関庫」「高瀬：高瀬（菊地）川鉄橋」「八代・人吉：球磨川鉄橋」「大分：大分川鉄橋」「川尻：緑川鉄橋」（註 3）である。

太平洋戦争期九州地方で使用された陸軍火砲は、高中空の航空機に対しては、八八式七糎野戦高射砲特（略称は“特七高”、口径 75<sup>mm</sup>、射高 9100m、毎分 15 発）と九九式八糎高射砲（略称は“八高”、口径 88<sup>mm</sup>、射高 10420m、毎 10 発。ドイツのクルップ砲を複製）の二種類を使用している。低空の航空機に対しては陸軍では 20 糎・13 糎の高射機関銃、海軍では 25 糎の高射機関砲が配置されていた。

県内では鉄道鉄橋を最優先として、その後は重要な軍需工場を守るための防空体制が 1945 年 5 月末頃にはほぼ完成した。県内先行調査例では、各地区当初は 6 門、その後は 2~3 門の小刻み分割配置で、敗戦時までには日窒水俣工場に見られるように、さらなる高射砲隊の駐留が進められた。公式の戦史記録では確認できず証言等により、県内各所（熊本市金峰山・芦北町佐敷白岩鉄橋・八代市二見他）で高射陣地が数多く設置されることとなった。

また、この当時の対空監視は県内各所で民間が行う目視監視が中心であり、近隣では唯一長崎市野母崎町の遠見山に電波警戒機乙が設置され、西部軍航空隊へ空襲情報をもたらしていた。

#### (2) 特設機関砲隊

管内の「重要交通施設の防空強化」のため、主に鉄橋防御を主務として高射第四師団に属する第一機関砲教育隊部隊が 1945 年 6 月 29 日に編成完了した。装備は十三糎機関砲で、配置は高瀬川橋は 4 門、球磨川橋 6 門、第二球磨川橋 2 門、第三球磨川橋 2 門の計 10 門（註 4）である。また、海軍艦船から撤去された機関砲を防空部隊として県内各地に配置していたが、その全容は不明である。

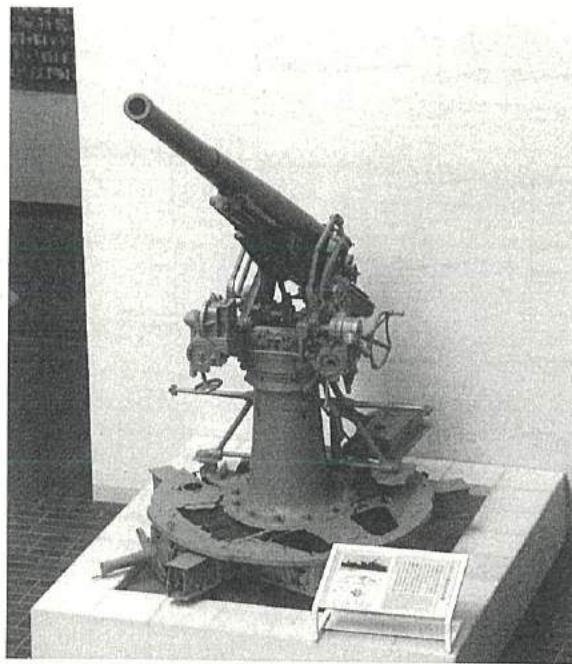


写真 1 靖国神社展示の八八式七糎野戦高射砲

\* くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

### (3) 熊本市内の防空状況

市内への配置記録では健軍飛行場、三菱重工業熊本航空機製作所、熊本機関庫に部隊が配置されていた。健軍飛行場には、他の飛行場同様に直接の防空として高射砲・高射機関砲等がまとめて配置されていたことが想定されるが、部隊特定にはいたっていない。三菱重工業熊本航空機製作所では、『健軍三菱物語』に空襲時に応戦した記録（註5）が散見されるが、場所は特定できていない。熊本機関庫は、駅裏の花岡山の山腹中位に砲床とも想定できる大型コンクリート構造物が点在している。

### (4) 緑川鉄道橋の防空状況

緑川左岸側に2基の高射砲が配置されていたとの証言（註6）を得ている。配備地点は現在九州新幹線路線内となり、住宅倉庫横に移動架車のままでの配置であったという。県内鉄道橋では唯一米軍機からの攻撃を受けており、1945年8月10日には爆弾78発が投下され機関車他3両が損害を受け、橋梁も破壊された。攻撃をした米軍機ガンカメラの写真が公開（註7）されている。

### (5) 球磨川鉄道橋の防空状況

球磨地方での防空施設は、肥薩線球磨川鉄橋2箇所である。また、短期間地域の防空のため現山江村役場横公園の高所に高射砲配置の証言（註8）がある。八代市球磨川鉄橋防御に関しては、鉄橋左岸の現高田小学校校庭に高射砲6門、鉄道線横に高射砲6門、鉄橋右岸の古麓地区に機関砲3門が配置（註9）されていたことが判明している。

### (6) 水俣市内の日本窒素水俣工場をめぐる防空状況

これまで無防備だった日本窒素水俣工場では、艦載機による爆撃等を1945年5月14日に初めて受け、工場や周辺の多くの民家、人が被害を被った。この激しい空襲により日窒工場防空の必要性が問われ、同年5月23日水俣市内に北九州で編成された機関砲第二十一大隊（六個中隊）の第六中隊が移駐してきた。これは、葛原忠彦中佐指揮の隊員330人の部隊で、日窒工場裏山の梅道と海側台地である丸山に陣地を構えた。

#### ア 梅戸陣地

梅戸陣地は、眼下に日窒水俣工場を望む東側の小高い丘の頂上に構築された。主要兵器はケキ砲（二式多連装高射機関砲・口径20ミリメートル・毎分300発）で、設置された6門の砲が電動装置で同

調して、単一目標に集中射撃できる特徴を有していた。現在までに確認された範囲だけでも現地には、砲床と想定されるコンクリート製一辺1.5mの

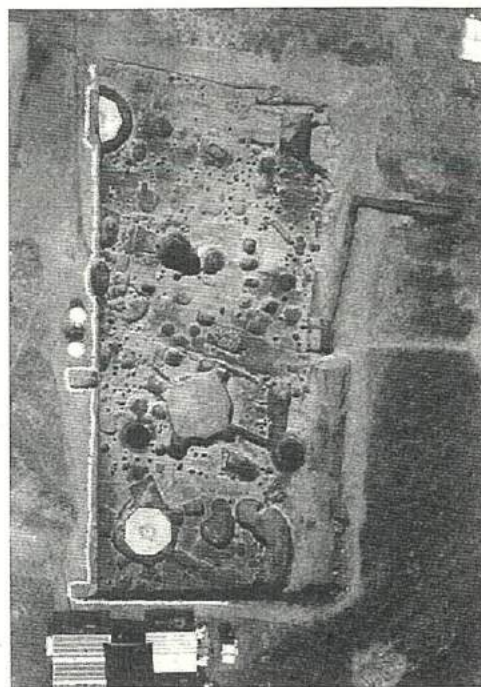


写真2 府内町遺跡発掘で確認された高射砲陣地

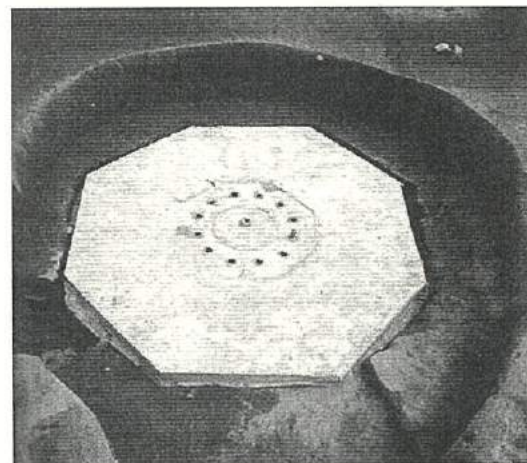


写真3 八角形コンクリート砲床基礎部  
『大分県の戦争遺跡』より



写真4 水俣市丸山陣地の高射第四師団第1機関砲教育隊第六中隊葛原隊 13耗機関砲ケキ砲（二式多連装高射機関砲）  
『水俣市史』より

六角形土台一基、コンクリート製の筒状で径 3m の構築物一基がいまも現存している。

#### イ 丸山陣地

丸山陣地は、丸島漁港の東側台地頂部に陣地が構築され、葛原隊一小隊が配置されていた。丸山は単独の台地で周辺は急傾斜地で現在は開墾も進み、段々の畑地がつくられていた。当時の証言では、梅道陣地と同様にケキ砲が、台地の頂部平坦部を中心に配置され、中央部には今も径一五 m の砲台設置後の陥没孔と想定される一基が残されている。また、周辺部にはコンクリート敷設の施設が数箇所散見されるが、全体状況は不明である。なお、7 月 31 日の空襲で、両陣地の高射砲隊はアメリカ空軍機に対して激しく応戦しており、梅戸陣地では応戦中に兵士 1 名が戦死、2 名の負傷者（註 10）がでている。

#### ウ その他市内の防空陣地

市内各所には丸山、梅戸のほか次の防空施設があり、日本窒素工場を防御していた。丸島陣地東方の古賀町（現古賀町チッソテニスコート付近）の平地に部隊名は不明であるが、部隊員 130 名程度からなる高射砲陣地が作られ高射砲 5 門が配置されていた。また菜切り地区（陸軍丸島・梅道陣地の中間台地）には、出水海軍航空隊から派遣された高射機関砲隊が陣地を構えていた。その他水俣第一小学校裏の高台の秋葉山、水俣駅南側台地の江南町の陣の坂にも、別部隊の高射機関砲部隊が布陣していたことが聞き取り（註 11）で判明している。

#### (7) 大分川鉄道橋の防空状況

熊本師管区高射砲隊分遣隊が配置された大分川の高射砲陣地跡地は、市街地開発事業の事前発掘調査が行われ、2002~2004 年大分県・大分市教育委員会により中世大友府内町跡遺跡の中世期の遺構とともに、合計 3 基の八角形砲床台座が確認（註 12）されている。この状況は、名古屋市で発掘調査され、その後整備されている名古屋市笠寺高射砲陣地と同型式砲床（註 13）であり、県内の設営式陣地でも同砲床及び類例形式と想定できる。

### 3. 高瀬（菊地）川鉄道橋梁の防空

#### (1) 高瀬川鉄道橋梁

高瀬川鉄道橋梁は、機関車の大型化にともない 1965（大正五年）に架け替えられ、下路式プラット・トラス構造四スパン橋梁鉄道橋として生まれ変わった。全長は 287m、橋脚にはフランス積み煉瓦でアーチ形状で保持されている。北側の繁根木川橋梁と共に

に当地鉄道インフラの要である。

爆撃目標となる菊池川鉄道橋梁についての唯一の写真資料は、1945 年 3 月 10 日米陸軍撮影の「3PR5M75-1V:37A」の写真偵察任務第 75 号である。白線で兩岸から囲むように表示し「90.35-2209」の番号を附し、「90」は日本の国別コード、「35」は玉名地区を含む久留米・熊本県北の地域コードを、さらには「菊池川鉄道橋梁の個別目標番号」である「2209」の記載である。これに「SURVEY REPORT NO. 207」（写真偵察調査報告第 207 号：7 月 19 日刊行）として、来るべき米軍本土進行作戦に向けて空襲目標として鉄橋・駅・兵器貯蔵所等の概要を報告したものである。詳細は高谷論文（註 14）を参照頂きたい。

#### (2) 桃田台地（菊池川左岸）の陸軍熊本師管区高射砲隊陣地

国鉄線が通る高瀬鉄橋、菊池川左岸側には、比高差 12m の桃田台地が伊倉方面より連なっており、現在は玉名市立運動公園が市民のスポーツ振興の拠点として設置されている。2005 年の運動公園西側駐車場の拡張工事にかかる前までは、六角形コンクリート製土台一基（註 15）が残されていた。

ここには高射砲第百三十二連隊の一中隊が配置され、八輦高射砲 6 門を円弧状に配置し、各砲台は約二 m 程地下げをして周囲は土塁で防御されていた。名古屋市笠寺陣地等の全国に遺存する陣地構造と同



写真 5 米陸軍撮影の「KIKUCHIGAWA RR BRIDGE」（写真調査報告第 207 号・7 月 19 日刊行）。高瀬川鉄道橋は白線で標示されている。工藤洋三氏提供。

様構成である。隊員は 100 名の規模、兵舎は高射砲陣地南側崖下に一棟建てられ、部隊員の一部は桃田集落にも駐屯していた。部隊長名は不明であるが東北地方出身者で、病弱であったことから地元の医者  
の往診をよく受けていた（註 16）という。

現在台地上は運動公園駐車場として整地されており、遺構は残されていないが、砲陣地西側崖面に砲

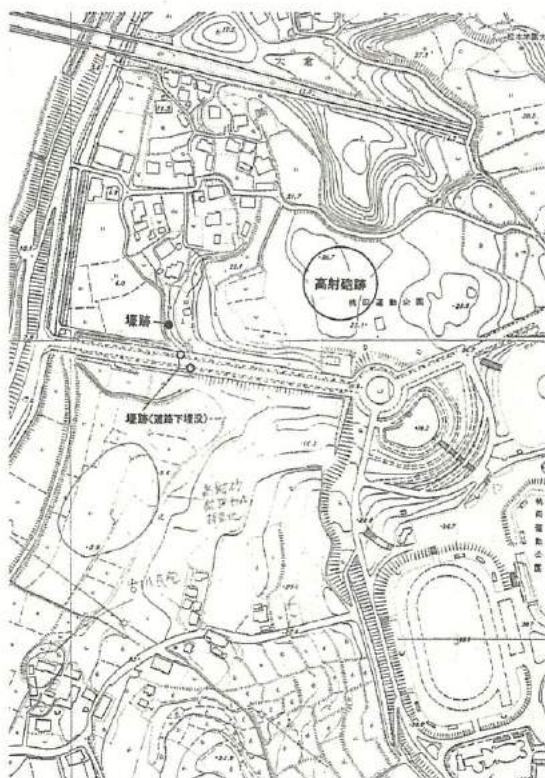


図 1 桃田高射砲陣地配置図

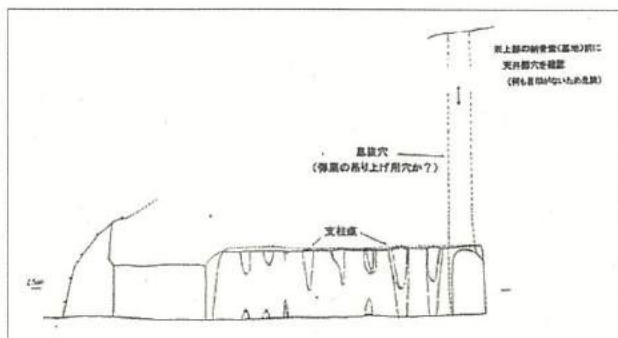


図 2 砲弾壕実測図

玉名市教育委員会たん父雅史氏提供

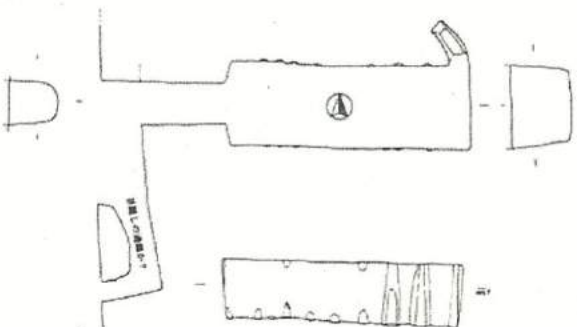


図 3 砲弾壕実測図

玉名市教育委員会たん父雅史氏提供

弾壕一基が現存する。玉名市教育委員会たん父雅史氏の実測図により形状の報告を行う。入口形状は現存横幅 1.5m、高さ 1.6m のかまぼこ型であり、爆風避け土塁造作の痕跡もある。壕全長 12.8m、横幅 3.1m、全高 2.2m で、内部には支持坑木痕跡片側八本残され、天井部には換気通気穴が崖上まで貫通している。当時の証言では、内部は木板が全面敷設されており、晴天時には壕前に炸薬等を広げ乾燥させる作業（註 17）も行われていたという。

ここからは射撃時に使用した砲弾の真鍮製キャップが、砲台眼下の畑から多数採集されており、今でも 50 個が保管されている。砲弾キャップには「100 式□□□□ 昭和十八年二月 東京第一陸軍造兵廠」の墨書銘が残されている。記録等から本部隊の配備時期は、1945 年 6 月以降である。

### (3) 鉄橋横の海軍機関砲部隊陣地(菊地川左岸)

菊地川左岸側、桃田台地眼下の国鉄線横踏切付近に、海軍高射機関砲隊が配置されていた。

配備時期は陸軍部隊からは後発する時期と想定され、機関砲は 2 基であり部隊名称は不明である。部隊員は 50 名程度、高瀬尋常小学校講堂に逗留し、指揮官は人吉地区部隊と併任（註 18）していた。

### (4) 永徳寺(菊地川右岸)の陸軍機関砲部隊陣地

永徳寺地区に 13 耗機関砲 4 門を装備した、機関砲第二十一大隊の一小隊が配置されていた。配備時期は、高射砲部隊とほぼ同時期の 1945 年 6 月以降である。射角等の視野確保のため、鉄橋周辺部は広域に伐採されていたという。高射機関砲は電動二連装で、そのコンクリート製円形土台が、敗戦後しばらく残置されていた。なお付近より径 13mm を測る砲弾部が採集され保管（註 19）されている。

## 4 墜落米軍機

国立国会図書館資料には、昭和 20 年 8 月 10 日、高瀬・高瀬川橋梁を空襲し、先述の高射砲陣地等から対空射撃を受け、鉄塔送電線に接触し墜落した米軍小型機に関する資料（註 20・21）が残され玉名歴史博物館展示で紹介されている。資料では墜落した米軍機は、単発副座であるが死亡者一人。墜落地は JR 線から南側 6 本目の現鉄塔横水田で、河川敷で火葬後、永徳寺集落内に墓標を建て埋葬し、昭和 22 年 6 月 22 日米軍が引き取りにきたと『玉名市史』でも再録（註 22）されている。

しかしながらこれまでに墜落機種・米軍戦死者・所属部隊名等は不明のまま戦後 68 年が経過してい

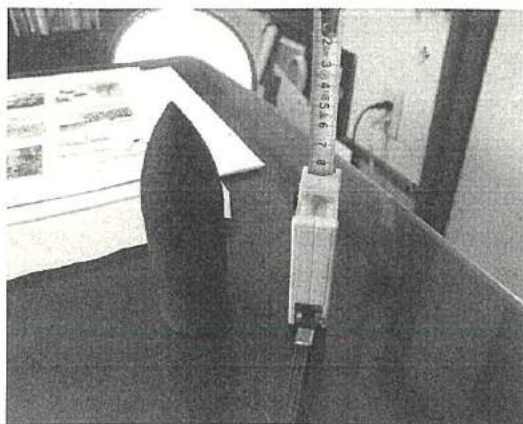


写真6 永徳寺陣地で採集された機関銃砲弾



写真7 桃田高射砲陣地跡で採集された墨銘書きの砲弾キャップ

た。また、当時戦死米兵遺体に対しての陵辱行為の風評も流され、敗戦後はGHQ戦争犯罪調査も行われるなど、当地においては戦争中の禁忌として扱われてきた。

#### (1) 8月10日の県内空襲

では、この8月10日空襲とはどのような空襲であったか概要を俯瞰する。「八月十日午前、沖縄基地を発進し、東方から侵入したB29と小型機の編隊約二百十機が県下一円を襲撃した。熊本市に対しても白川以東から以南にかけて焼夷攻撃と機銃掃射を加え、七月一日の空襲で焼け残っていた、本山町、春竹町、本荘町、大江町などを焼くとともに、熊本市立高等女学校などが焼失した。熊本市の被害戸数は一五五一戸、内家屋全焼一四九戸、半焼五八戸、半壊二戸、罹災人員六三〇八人、死者四五人、負傷者四三人にのぼった。」また「熊本のほか、宇土、水俣、隈庄などでも被害が大きかった。鹿児島本線緑川鉄橋橋脚が爆破され不通となり、宇土町では中心部を大半焼失したほか、宇土保健所・宇土駅・宇土国民学校・宇土高等女学校なども焼失し、日本合

成は操業不能に陥った。隈庄町周辺では隈庄・豊田・杉上・東部国民学校が焼失。水俣町は中心部が焼失、日室水俣工場は操業不能に陥った」。(註23)と日本側は記載している。

しかしながらこの日の熊本市内への大規模空襲は、B29によるものではなく、沖縄移駐の陸軍極東航空軍である第5・7航空軍(註24)によるものであった。米軍資料によると第5航空軍からは第3・5・43爆撃機群団が、第7航空軍からは第11・41・319・494爆撃機群団と第318・413・507戦闘機群団のB24・B25・A26による焼夷弾、

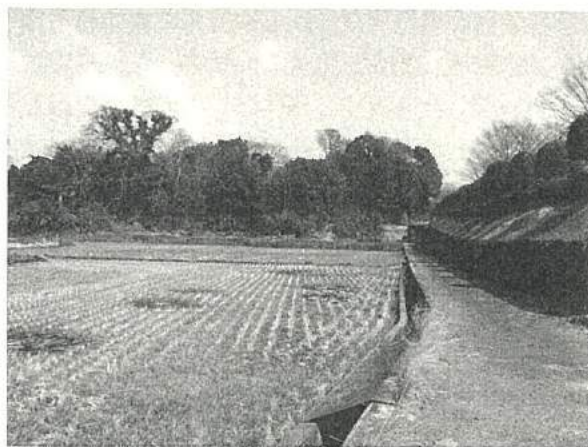


写真8 砲弾壕の遠景



写真9 壕内部の様子



写真10 菊池川右岸よりの高瀬鉄橋、桃田台地の遠望



1947年5月1日付のJames B. LYNNによる報告  
詳細：  
福岡にて

この事件の調査は、GRAHAM少尉に対する虐待行為はなかったことを示している。飛行機の墜落とGRAHAM少尉の死についての関係者の尋問からは、P47が1945年8月10日に、高圧線に接触して、日本、九州の熊本県玉名郡玉名町に墜落した時、GRAHAM少尉が即死したことが明らかである。収集された資料の再調査からも、陸戦の法規違反や戦争犯罪に該当する行為を行った人物は見出すことはできず、この調査は終了する。(以下略)

#### イ「第108墓地登録部隊」報告

現地での聞き取りにおいて「通訳の二世を連れた米兵2名がジープに乗ってきた」との証言が残されている。この部隊は日本国内で死亡した連合軍兵士の遺体を回収する専門の部隊で「第108墓地登録部隊」である。

ここで報告された英文の全文和訳を付す。

軍事郵便局 929 日本、九州、福岡、第108墓地登録部隊C分遣

不明のX-446(火葬された)

主題:兵站部WD文書1042号ケースヒストリー491号の付属

Declassified E.O. 12063 Section 3-402/WHOD NO. 775011

GHQ/SCAP Records (RG 33), National Archives and Records Service

Description of contents

(1) Box no. 2369

(2) Folder title number: 2369

(3) Date: 1945.8.10

(4) Subject: 

| Classification    | Type of record    |
|-------------------|-------------------|
| 100-100000-100000 | 100-100000-100000 |

(5) Item description and comment:

(6) Reproduction: ☒ Yes ☐ No

(7) Film no. Sheet no.

(Compiled by National Archives Library)

写真12「1948年5月20日」報告の1頁

(Earl G. GRAHAM JR. と特定された)

1. 1947年7月3日、第108墓地登録部隊の第1分遣隊は、熊本県玉名郡玉名町大字永徳寺(座標:1363.5-1086.1)に埋葬されたアメリカ陸軍航空隊の人物の火葬された遺体を調査して発掘した。

2. 分遣隊は、遺体を火葬したタカヤマフクマツと連絡をとり、飛行機の墜落と遺体の火葬について、以下のような情報を得た。

a. 飛行機は1945年8月10日の午前11:00に墜落した。

b. 飛行機は対空砲火を受け、高圧線に接触した。

c. 飛行機は墜落と同時に炎上し、付近の農民たちによって、ひどく焼け焦げた遺体が機体から引っ張り出された。

d. 衣服はほとんど焼けて残っておらず、靴も焼失していた。遺体は後頭部に傷を負っていた。

e. パイロットの遺体は1945年8月10日に埋葬されたが、2週間後に掘り返されて火葬された。

f. 遺体は墜落現場に於いて薪で焼かれた。

3. 分遣隊は、□□□□(氏名は著者が伏せ字とする)、および最初に遺体を埋葬した玉名町役場の職員と連絡をとり、以下のような情報を得た。

a. わずかに残っていた衣服に目印になるようなものはなく、持ち物はなかった。

b. 墜落直後、近くの高射砲部隊の隊員が80人程来て、飛行機の残骸を現場に埋めた。

c. 板倉によると、パイロットの風貌は以下のものであった。

身長:約6フィート(180センチ)

体重:約165ポンド(74キロ)

髪の毛:茶色

4. 分遣隊は墜落現場へ行き、以下のような情報を得た。

a. 発見された残骸のプレートから、飛行機はリパブリックP47と思われる。

b. プレートは横浜の米軍墓地へ送られた。

c. 翼に描かれた飛行機番号は488196

d. タイヤ:34X9.9-10ply 3-6 13A230011

e. 胴体:89/84910

f. モーター番号(認識番号ではない):8467255

5. 分遣隊は熊本県玉名郡玉名町大字永徳寺の墓地(座標:1363.5-1086.1)へ行き、火葬された遺体を発掘し、以下のような情報を得た。

a. 墓碑:「ここに無名の勇士が眠る」

b. 遺骨は小さな木の箱に入れられて約2フィート

(60センチ)の深さに埋められていた。

6.火葬された遺骨は、「不明 X446」として横浜の米軍墓地へ送られた。

(署名) 分遣隊長 DON SEBASTIAN 一等兵

#### ウ 「戦争犯罪容疑調書」

来玉した第108墓地登録部隊C分遣隊は、役場職員の□□□□(氏名は著者が伏せ字とする)に対し調書を取り、次の様なやりとりが記録されている。英本文の一部分の和訳を付す。

(略)

問:あなたが墜落現場へ到着して目撃したことを詳しく述べてください。

答:飛行機は午前11時頃墜落し、私は11時30分頃現場へ到着しました。飛行機は炎上しており、操縦士は操縦席から投げ出されて飛行機の胴体の下に押し付けられていました。彼の体は露出し、衣服は腕や肩の部分を残して、胸からは全部焼けていました。火災が完全に鎮火してから遺体が引き出されました。

問:あなたが現場へ行った時、操縦士は生きていましたか。

答:それは全くあり得ません。

問:あなたが現場へ行った時、飛行士の遺体にどれ

くらいまで近づくことができましたか。

答:私は飛行機が燃えている時、約5ヤード(4.5メートル)の所にいました。20分後、私は操縦士に近づいて、手を彼の口にあてて、息をしているかどうかなど、生きている兆候があるか確かめようと思いました。また、彼の眼を覗きこみましたが、彼が生きている兆候は全くありませんでした。

問:あなたは、操縦士が墜落と同時に死亡したことは確実だと思っているのですか。

答:はい、全くその通りです。

問:操縦士がどのように取り扱われたか説明してください。

答:火災が収まってから飛行機の胴体の下を掘って、操縦士の遺体を引き出しました。遺体は飛行機から約5.5ヤード(5メートル)の所に、そのままの姿で直ちに埋められました。約10日後、遺体は掘り返されて火葬され、遺灰は箱に入れられ、160メートルほど離れた場所に埋葬され、現在もそこに眠っています。

問:誰かが操縦士の遺体に暴行を加えましたか。

答:いいえ、それはあり得ません。

問:遺体が飛行機の下から引き出される時、誰かがそれを棒で突きましたか。

答:いいえ、彼の遺体は臀部から焼けた肉が垂れ下がっているような状態で、余程神経の太い者でも正視するに堪えないぐらいで、誰もそんなことはしていません。

問:警官か役場の職員が、町の通りを遺体を引きずりましたか。

答:我々が遺体を飛行機の下から引き出して5メートル離れた所に埋める時だけ、引きずりました。

問:人々が操縦士の遺体を見たのは、この時だけですか。

答:はい、そうです。

問:操縦士の遺体が埋められる時、誰かがそれを棒で突きましたか。

答:それは絶対にありません。日本人は死者に深い敬意を払うので、例え悪口を言う者があったとしても、遺体の凌辱などはさせません。

(略)

#### 5 結 語

本稿前半では高瀬川橋梁を日本軍が如何に防御していたのか現地調査を進め、県内各地の防空状況を俯瞰し比較した。上田壤一氏の『実録熊本大空襲』には、米軍側資料として「熊本は以下のごとく防御

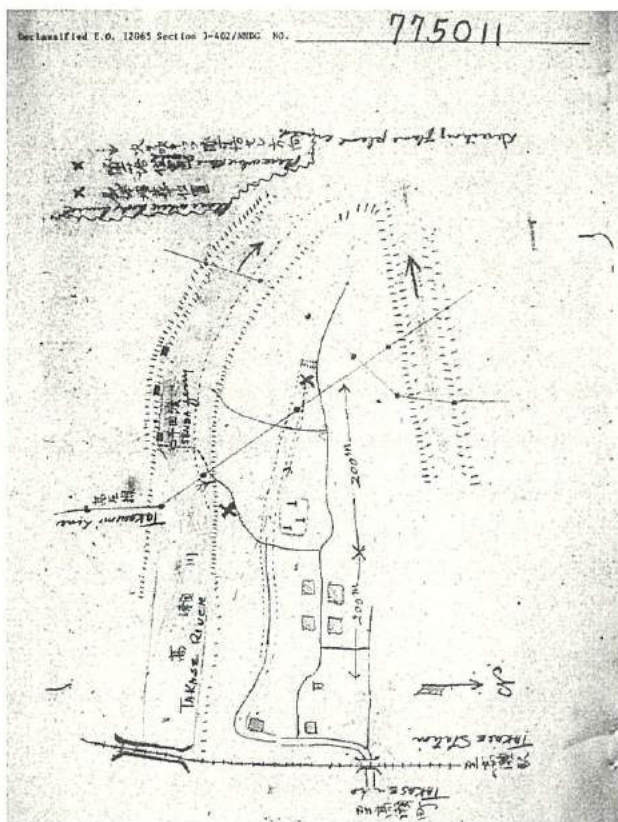


写真13「1948年5月20日」報告の掲載地図の1枚

されていた。重高射砲二十八門、中高射砲十六門、探照灯推定二ないし六基…熊本の防衛力（特に探照灯）は夜間攻撃に極めて貧弱であった。わずかに中程度で、精度の低い対空砲火が予想され、しかもそれは攻撃軸の決定の主要な参考事項とはならなかった」（ルメイ報告 七月二日）など熊本の防空状況の記載が見られる。熊本大空襲をはじめとする大戦末期のB29の無差別都市攻撃では、戦争をあくまでも遂行するため限られた防空部隊を工場施設や鉄道橋・軍施設を守るためだけに奔走し、国民を守れなかったこの国の防空状況が見えてくる。

後半では、本地区の防空に関わった1945年8月10日に起きた米軍機墜落とその後のGHQ調査を詳述した。墜落機は沖縄県伊江島にサイパンから7月2日に進出し部隊配備を行っていたP47を装備した第507戦闘機戦隊（註27）で、当日は53機出撃しており、主任務は両翼下補助タンクに165ガロンのナパーム剤を入れた攻撃（註28）であった。その後、北方に転じた部隊は玉名飛行場を攻撃し、第465中隊所属のP47（機体番号44-88196）、搭乗員はEarl G. GRAHAM Jr. 少尉機が撃墜されたことが判明した。

また、新出資料により、戦争に敗れ連合国に占領されたなかでの当地でのGHQによる戦争犯罪調査の一端を垣間見た。調査内容は告発文にあった棍棒や竹やりをもって「人々が暴行を加えたか」の一点であった。当時全国で、投降した米パイロットを虐殺したとか、遺体に暴行を加えたとか、色々な噂が流れた。熊本県阿蘇郡では被弾したB29から落下傘降下し、投降せずに反撃した米兵を住民が射殺した事件も発生した。内地での捕虜飛行士（軍は一般捕虜としては扱えないとして戦犯容疑の「敵機捕獲搭乗員」と称していた）の数は568人、無事本国に生還できた者は303人であった。鬼畜



写真14 玉名市永徳寺に墜落したP47 サンダーボルト  
戦闘爆撃機D型と同型機

米英のスローガンの基、大戦で父や夫・兄弟が亡くなり、5月10・13日の大浜飛行場空襲では民間人13人が亡くなるなど、米兵憎しの思いがこの暴行の背景にあったのであろう。

本調査報告書を含むGHQ資料は、戦後サンフランシスコ講和条約が結ばれ、米軍が日本から引き揚げる時一緒に本国に持ち帰られ、現在は米国国立公文書館に保管されている。これらの一連資料は1980年代から米国で公開され、日本の国立国会図書館では逐次、現在も撮影が続けられており憲政資料室所蔵マイクロフィルム資料（1号-2796号）として公開されている。

本稿を発表するにあたりGHQ資料をご提供いただいた福林徹氏、米軍空撮資料を提供いただいた工藤洋三氏、弾薬壕測量図を提供いただいたたん父雅史氏、多くの証言者の方々、まとめにご助言いただいた中山博之氏、末永崇氏にお礼を申し上げます。

#### [ 註 釈 ]

註1 「昭和19年6月に編成された西部高射砲集団は、当初西部軍ついで第十六方面軍に隷属し、司令部は小倉に位置した。（中略）旅団はその主力を北九州倉幡地区に、一部を長崎、福岡及び大牟田に配置し、要地の防空に任じていた」。その後、高射第四師団司令部が動員され、5月12日には動員が完了した。（軍令陸甲第七十一号：昭和20年4月28日）「西部高射砲集団の作戦準備」「高射第四師団の編成」『戦史叢書 本土決戦準備 - 九州の防衛 -』朝雲新聞社 1972

註2 「五月八日高射第四師団主力を第五十七軍司令官の指揮下に入れ、都城付近に進出させるなど、高射砲部隊全般の配置変更を命じた」（陸西作命甲第百十八号二十年五月八日）「高射第四師団主力の南九州転進」防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』朝雲新聞社 1968

註3 註2掲載書内の陸西作命甲第百十八号の「別表 高射砲部隊部署及び配備変更計画表」の熊本師管区配属の項による『本土防空作戦』戦史叢書

註4 二十年五月陸密第二八二四号により、特設機関砲隊（十三耗機関砲二十四隊）が臨時編制され、高射第四師団長の隷下に入った。「陸密第二八二四号ニ基ク重要交通施設防空部隊配置表」の熊師の項による。「陸西作命甲第百四十五号」『本土防空作戦』戦史叢書

註5 細川隆康「昭和20年 熊航」「工場の東側に陣地をおいた高射砲中隊が米軍機目がけてポーンと

一発発射した。全然命中などしなかった」『健軍三菱物語』岡野充俊 自家製本 1989

註6 2003年4月の現地調査による木村氏の証言による。

註7 海外ネットオークションに出品された写真は三葉で、熊本市富合町杉島地区の緑川橋と杉島集落への爆撃、機銃掃射の様子であり、緑川鉄道橋への直接攻撃はまだ確認できていない。「1945年8月、熊本市富合町の緑川橋付近」熊本日日新聞社 2010年7月6日

註8 2006年6月、現地聞き取り調査での山下完二氏の証言

註9 中村正義「八代の空襲 球磨川鉄橋守備隊と爆弾攻撃」『子どもと歩く戦争遺跡Ⅲ 熊本県南』熊本の戦争遺跡研究会 2007。『八代の戦跡』人権NPO ちなもい 2008

註10 葛原忠彦「水俣・丸島高射砲部隊の陣中日記(上)(下)」『記録・熊本空襲 No 九・一〇』熊本空襲と戦争下の暮らしを記録する会 1978。「私の空襲記録」『新水俣市史 上巻』水俣市史編纂委員会 1991

註11 高谷和生「水俣市内の防空陣地 配置された高射砲陣地」『子どもと歩く戦争遺跡Ⅲ 熊本県南』熊本の戦争遺跡研究会 2007

註12 大分県教育委員会実施の中世大友府内町遺跡第七次調査で砲床1基、2年後の大分市教育委員会実施の中世大友府内町阿路遺跡第十七次調査で砲床2基の計3基が確認された。その他調査区内からは、円形土坑内から木製部材で構成される高射機関砲台座、半地下式倉庫2基、通路等が確認されている。『大分の戦争遺跡』大分県文化財保護協会 2005

註13 2006年8月高谷の現地調査による。屋外展示状況については、見晴台考古資料館 HP 等にも掲載されている。高射砲陣地の復元は「笠寺高射砲陣地」『本土決戦』歴史群像シリーズ 60 巻に詳しい。

註14 詳細は次の高谷論文を参照いただきたい。高谷和生「米軍撮影の陸軍玉名飛行場空撮写真の検討」『歴史玉名 第65号』玉名歴史研究会 2013。なお、基写真は、空襲・戦災を記録する会全国連絡会議事務局長工藤洋三氏より提供された「写真偵察調査報告第207号」である。工藤洋三『米軍の写真偵察と日本空襲 - 写真偵察機が記録した日本本土と空襲被害』自家製版本 2011

註15 2005年の運動公園造営時元図に八角形コンクリート製土台が描かれていたが、その後駐車場

拡張時に撤去された。当時国民学校六年生だった美並氏は、「砲台は六基あり、横に並んでいた。半径3mの大きさを2mほど掘り下げられ、砲身は水平になっており壕の縁にあたっていた」と証言された。

註16 当時中学生で医師であった父親が部隊長への往診をした鹿井禎二氏の証言による。

註17 高射砲陣地の下段に畑を持っておられた古田秋男氏が父親と一緒に畑から多数の信管キャップを砲撃後に採集され現在も保管されている。また、畑作業中に兵隊が炸薬等を乾燥させる様子を目撃されている。

註18 第十六方面軍はさらに船舶砲兵団隷下の高射部隊を対空戦闘実施に関し区処し、また特設機関砲隊をもって重要交通施設の防空援護に任ずるなどの措置をとった。さらに方面軍は6月下旬には、佐世保鎮守府隷下の機関砲隊(高射機関砲三六門)を指揮下に入れ、主として交通要点の防空強化を命じた。(睦西作命甲第七十七号二十年六月二十三日)「別紙 指揮下ニ入ル海軍機関砲隊」防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』朝雲新聞社 1968。吉永邦雄・海軍部隊指揮官の松浦哲了氏の証言による。

註19 戦後現地にはコンクリート製土台と金属固定具がそのまま残され付近の子どもの遊び場であったという。吉永邦雄氏・美並素氏の証言による。

註20 国立国会図書館憲政資料室所蔵のGHQ調査報告書一部が「撃墜された米機についての連合軍の報告」及び英文を和訳の「撃墜された米機についての日本側の報告」として図録に紹介されている。『昭和20年の玉名展終戦から50年』玉名歴史博物館 こころピア 2005

註21 中山博之氏の調査研究による。「米軍の記録に見える大浜の空襲」『歴史玉名 第23号』玉名歴史研究会 1995

註22 前掲21研究の再録として掲載。「玉名飛行場と高瀬鉄橋」『玉名市史 上巻』玉名市史編纂委員会 2006

註23 「熊本市空襲被害状況」『熊本市戦災復興誌』熊本市都市計画局 1960

註24 工藤洋三「沖縄の極東航空軍による九州に対する空襲」空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会資料 2014

註25 中山博之「玉名における大東亜戦争一末期の兵力配備・飛行場など」『歴史玉名 第9号』玉名歴史研究会 1991

註26 墜落の様子は当時旧制中学生であった中山

氏の証言による。森氏からは遺体を実見し「顔に大きな傷があった、金髪の若い男性、白人であった、膝から下が切断していた」の証言を得た。また米兵遺体への暴行行為については、高谷時明氏・森氏・小川氏・吉田氏他多くの証言を得たが、行為の有無を特定するまでには至らなかった。

註 27 当部隊は 1944 年 11 月米国本土で編制。翌年 4 月まで訓練した後、南太平洋戦線に島伝い飛行し 7 月 2 日サイパン島から沖縄県伊江島に進出。第 507 戦闘機群団は第 463、464、465 戦闘機戦

隊からなり、大学出身の学徒訓練将校のみで編制され、兵力 150 人、P47D 型 111 機を装備。P47 は米陸軍の大戦後半期の単発一人乗りの主力戦闘機であり、特に重武装、爆弾等の重搭載から戦闘爆撃機（ヤーボ）として活躍した。

註 28 前掲書 24 と同じ

[ 参考文献 ]

○高谷和生他『熊本の戦争遺跡』創想舎 熊本の戦争遺跡研究会 2010